

『妙法蓮華經』に見られる“況”字構造の 機能的分析

椿 正 美

0. はじめに

古典漢語には、複文の前部に程度の軽い内容を揭示し、それによって後部の内容の当然性を強調するという表現形式がある。この形式は、前部で程度を抑えて後部で引き揚げるといふ手法であることから抑揚形と呼ばれ、後部の冒頭に連詞“況”を挿入することにより構成されている¹⁾。

抑揚形の基本的な構成を図式化すれば次のようになる。

A + “猶” + ～、“況” + B + “乎”

Aすら猶お～、況んやBをや。

(訳) Aですら～、ましてBならば尚更～。

この場合は程度を抑えられた表現がA、引き揚げられた表現がBに当たる。また、ここに示したように、前部には“猶”“尚”“猶尚”（「なお」）等や“且”（「かつ」）が連詞として配されることもある。例えば、『戦国策』「燕」“死馬且買之五百金、況生馬乎（「死馬すら且つ之を五百金に買ふ、況んや生馬をや」）。”では、“死馬”ですら“五百金”で買い上げられたのだから“生馬”ならば尚更それが可能であると述べられ、その当然性を強調するため、文中には“且”“況”が挿入されている。

このように抑揚形を構成して対象に当たる要素の程度の高さを強調するという表現方法は、強い説得性が求められる經典の内容には相応しいものであり、

『妙法蓮華經』に見られる“況”字構造の機能的分析（椿）

鳩摩羅什（344-413）の訳出による大乘仏教の經典『妙法蓮華經』（以後は略称『法華經』）を使用）の文中に於いても複数回の使用が確認される。その状況については戸田1965：141でも紹介され、抑揚形とは「一方を強調するために他方を軽く抑える」形式であると説明されている。

本論では、『法華經』文中に見られる“況”字構造の機能を分析し、抑揚形が構成されたことの効果について古典漢語文法の立場から探っていく。尚、“況”は常に単独で使用されるとは限らず、他の語彙を前置または後置させることもあるため、本論中では、“況”が単独使用された場合と複合語を形成して使用された場合それぞれの用例を挙げることにする。

1. “況”の語義と機能

“況”は“水”と音符“兄”により構成された会意兼形声文字であり、『説文解字』には“寒水也（「寒水なり」）。”と記されている。但し、この義による用例は実際には存在しないことが白川1996：320により確認されている。

牛島1967：366によれば、司馬遷著『史記』に見られる複文の前部と後部の統合関係には、前部と後部が並列的または対照的に表述された「接続」、前部の内容が後部の条件に当たる「連関」の2種類の形があり、“況”は「連関」の関係にある複文の中で譲歩を表現する場合に使用された連詞に含まれている。また、藤堂1978：719は「兄は頭の大きい子供を描いた象形文字」であることから、“況”は「水が前に比べて益々大きく増える事」を意味し、転じて「前より程度が激しくなるの意」の表現にも使用されたと述べている。

以上の記述からは、“況”は程度が高い要素の表現を後続させることにより内容を強調する語彙として広く認められていたことが分かり、その機能は文中に抑揚形を構成するために適切な効果をもたらす語彙であると解釈される。²⁾

2. “況”の単独使用

本章では、まず“況”が単独使用された場合の状況を調査対象とする。『法華經』全文中に於いて“況”が単独で使用された部分は、僅か2箇所³⁾に止まる。

それらを次に挙げる。

(1) T09-0040A³⁾

各将六万、恒河沙等眷属、況将五万・四万・三万・二万・一万恒河沙等眷属者。(「從地涌出品」)

各(おのおの)六万恒河沙等の眷属を将(ひき)いたり、況んや五万・四万・三万・二万・一万恒河沙等の眷属を⁴⁾將いたる者をや。

(2) T09-0031B

而此經者、如来現在、猶多怨嫉、況滅度後。(「法師品」)

而も此の經は如来の現在すら猶お怨嫉多し、況んや滅度の後をや。

(1) では、“一一菩薩”が六万という“恒河”(the Ganges River)の砂の数にも等しい人数の眷属を伴うのだから、五万以下の眷属ならば尚更あり得ると述べられている。文中では“将五万・四万・三万・二万・一万恒河沙等眷属者”が存在することの当然性が“況”の挿入により強調されている。

太田1964:153には『孟子』で使用された連詞、更に太田1964:185にも『史記』「檀弓篇」で使用された連詞が掲げられているが、その両方に“況”は含まれており、何れの場合でも表示する内容は「並列添加」となっている。(1)の場合、同様の行為や目的物でありながら数量に増加が認められる要素の表現が添加され、“況”は条件の範囲の拡張の表示に適用されたと解釈される。

尚、抑揚形の基本形式は“況〜乎”であるが、(1)の場合は終尾詞の“乎”が省略されている。このように抑揚形の文体では“乎”が省略されることもあり、戸田1965:147は「『法華經』では“乎”の字のないものばかりである」と認めている。

『妙法蓮華經』に見られる“況”字構造の機能的分析（椿）

（2）では、“未曾顕説（「未だ曾て顕説せず」）”の状態にある“法華經”に対し、世尊の存在する今ですら“怨嫉”の態度を多く示されるのだから、入滅した後ならば尚更その可能性は高いと述べられている。文中では“多怨嫉”の発生が想定される時期に“滅度後”も含まれることの当然性が“況”の挿入により強調されている。

ここには、連詞“猶”の使用も確認される。『法華經』文中で“猶”“尚”“猶尚”等の連詞が“況”と連用される場合がある可能性については戸田1965：148も認め、それらの字には「すら」「さえ」の意味が含まれると記している。例えば、「信解品」“爾時窮子、雖欣此遇、猶故自謂、客作賤人（「爾の時に窮子此の遇を欣ぶと雖も、猶故自ら客作の賤人と謂えり」）。”では、“自謂客作賤人”という結果になるための条件として“欣此遇”が設定されることの意外性が強調され、そこには“猶尚”が使用された場合の効果について確認することができる。

3. 他の語彙との連用

『法華經』文中に見られる“況”の殆どの用例では、“況”と他の語彙との連結により形成された複合語が使用されている。本章では、“況”に“何”を前置させた“何況（「何に況んや」）”と“復”を後置させた“況復（「況んや復」）”を取り上げ、それぞれの使用状況について分析する。

3. 1. “何況”

“何況”は戸田1965：148が『法華經』に見られる抑揚の形として挙げた表現に含まれ、その場合の“何”については「疑問ではなく意味を強める字」に当たると述べられている。例えば、『淮南子』「人間訓」“夫一麀而不忍、又何況於人乎（「夫れ一麀にも忍びず、又何ぞ況んや人に於てをや」）。”では、一匹の“麀”（子供の鹿）でさえ“忍”の対象にならないのだから、価値の高い“人”

『妙法蓮華經』に見られる“況”字構造の機能的分析（椿）

ならば尚更あり得ないと述べられている。この場合でも、“何”は“況”の意味を強化する効果を発揮したと捉えられる。

本項では、『法華經』に見られる“何況”の使用状況を取り上げる。尚、“何況”は常に行為や現象を示す表現が対象になるとは限らず、事物や存在者を示す表現が対象となる場合もあるため、本項では、対象に当たる動詞が“何況”に後続される用例、対象に当たる名詞が“何況”に後続される用例を挙げ、それぞれの特徴について分析を進める。

3. 1. 1. “何況” +〔対象が動詞となる表現〕

まず、『法華經』に見られる用例の中で“何況”以後の部分に対象の動詞が含まれたものを取り上げる。

次に例文を挙げる。

(3) T09-0007B

十方世界中、尚無二乗、何況有三。（「方便品」）

十方世界の中には、尚お二乗無し、何に況んや三あらんや。

(4) T09-0038C

於無量國中、乃至名字、不可得聞、何況得見、受持讀誦。（「安樂行品」）

無量の国の中に於いて、乃至名字をも聞くことを得べからず、何に況んや見ることが得、受持し讀誦せんをや。

(3) では、“十方世界”には“二乗”（第二の乗り物）すら存在しないのだから、“三乗”（第三の乗り物）の存在は尚更あり得ないと述べられている。ここでは、“有三”の可能性が低いことの当然性を強調するため“尚”と“何況”が挿入されている。

呂叔湘1944：198は、文言の典型的な“逼進”（強制）の文体では、前部で常用される“猶”“尚”等と後部の“況”との呼応により反語形が作成されると述べ、更に白話の場合には“況”が“何況”に変わることについても記している。

『妙法蓮華經』に見られる“況”字構造の機能的分析（椿）

また、楊伯俊2016：166は、古典漢語の“何況”は文中で前後の意味が反対または不同であることを示す転折連詞に属し、複文の場合は前部に“猶”“尚”等を配して反語形を作成することもあると述べている。(3)の場合、程度を抑えた表現として掲げられた“無二乗”が条件となり、“有三”が成立する可能性の有無を問う内容が構成され、そこでは“尚”“何況”の挿入により反語形が形成されている⁵⁾。

(4)では、“名字”(名声)すら聞くことが不可能なのだから、“得見、受持読誦”の実施ならば尚更であると述べられ、その当然性を強調するため“何況”が挿入されている。主体については(4)の直前に“是法華經(「是の法華經は」)”と明示され、それに続く“於無量國中”が条件の部分に当たる。

(3)に含まれた動詞“無”と“有”、(4)に含まれた動詞“聞”と“見”には、意味的に大きな隔たりが認められる。そこに発生する程度の違いを示すためには、上記のように意味の強化を機能とする“何”を前置させた“何況”の挿入は適切な表現方法と判断される。

(3)(4)の形式は何れも“何況”を後部に挿入した複文となっているが、『法華經』全文中に見られる“何況”の用例は、全てが複文の形式により構成されたものではなく、単文の文頭に“何況”が置かれ、以後の部分に当然性を強調する内容のみが表示されたという用例も含まれている。このように“何況”の使用される文体が複文に限らないという可能性については、太田1958：320も「前の句を承けていうのであって、必ずしも前の句とあわせ複句(複文)をつくるとはいえない」と認めている。

そのような例文を次に挙げる。

(5) T09-0013A

何況長者、自知財富無量、欲饒益諸子、等与大車。(「譬喻品」)

何に況んや長者自ら財富無量なりと知って諸子を饒益せんと欲して等しく大車を与うるをや。

(6) T09-0030C

何況於大衆中、広為人説。(「法師品」)

何に況んや大衆の中に於て広く人の為に説かんをや。

(5) 以前の部分では、長者が燃え盛る家屋から子供達を逃れさせるため、羊車・鹿車・牛車を与えると約束して“随汝所欲、皆当与汝（「汝が所欲に随って、皆当に汝に与うべし」）。”と告げた経緯が示され、脱出させた後に1つの乗り物さえ与えなかったとしても“無虚妄也（「虚妄なし」）。”つまり嘘には当たらないと主張されている。その理由として、(5)直前の部分で長者が“我方便、令子得出（「我方便を以て子をして出づることを得せしめん」）。”つまり良い手段を使って子供達を脱出させると宣言していたこと、それに続く(5)では、子供達に等しく“珍宝大車（「珍宝の大車」）”を与えたことが挙げられている。ここでは、実行した任務の重要性を強調するため“何況”が挿入されている。

(6) の場合は、直前に掲示された“当知是人、則如来使、如来所遣、行如来事（「当に知るべし、是の人は則ち如来の使なり、如来の所遣として如来の事を行ずるなり」）。”の“是人”が主体に当たり、この“是人”は更に前の部分“若是善男子、善女人、我滅度後、能竊為一人、説法華經、乃至一句（「若し是の善男子・善女人、我が滅度の後、能く竊かに一人の為に法華經の乃至一句を説かん」）。”の“是善男子、善女人”を指している。それらの人物が可能な作業として文中では世尊自身の“滅度後”に於ける“竊為一人、説法華經、乃至一句”が挙げられ、その内容を受けた(6)では、同様の作業による“於大衆中、広為人説”ならば尚更それは可能であると述べられている。ここでは、“於大衆中、広為人説”実施の可能性が高いことの当然性を強調するため“何況”が挿入されている。上に述べたような“何”に含まれる意味強化の機能を重視すれば、この“何況”は“法華經”を説く対象の範囲を示す“竊為一人”と(6)“於大衆中、広為人”の隔たりの大きさを示すには適した表現と判断される。

3. 1. 2. “何況”＋〔対象が名詞となる表現〕

続いて、『法華經』に見られる用例の中で“何況”以後の部分に対象の名詞が含まれたものを取り上げる。そのような用例では、行為を示す動詞が“何況”以前の部分に置かれ、その対象に当たる表現が“何況”以後の部分に置かれた形式が構成されている。

次に例文を挙げる。

(7) T09-0012C

以我此物、周給一国、猶尚不置、何況諸子。(「譬喩品」)

我が此の物を以て周く一国に給うとも、なお置しからじ、何に況んや諸子をや。

(8) T09-0045B

已為深信解相、何況読誦受持之者。(「分別功德品」)

已に深信解の相と為(なづ)く、何に況んや之を讀誦し受持せん者をや。

(7)では、所有されている“七宝大車”の分量は“周給一国”するには足りないものではなく、“諸子”(子供達)に与えるならば尚更であると述べられている。ここでは、“七宝大車”の分量が“諸子”に与えるには十分であることの当然性を強調するため、“猶尚”と“何況”が挿入されている。

(8)では、もし“善男子、善女人”の中で世尊の滅後に“聞是經、而不毀訾、起隨喜心(「是の經を聞いて、毀訾せずして隨喜の心を起さん」)”の状態にある者がいれば、その者に対しては“深信解相”と呼び、“読誦受持之者”ならば尚更その必要があると述べられている。ここでは、“読誦受持之者”に対して“深信解相”と呼ぶことの当然性を強調するため“何況”が挿入されている。

黎錦熙1992:198は、複数の単文が互いに接近または関連し合うことにより構成された複文に対し、それらの単文の内容が平等且つ両立の関係にあることから等立句と呼称し、更に等立句を並列文、選択文、承接文、転折文に分類して

『妙法蓮華經』に見られる“況”字構造の機能的分析（椿）

いる。“何況”は並列文で使用される連詞に属し、表示する内容は累加となっている。(7)(8)の場合、前部に示されたものと条件が類似する要素を新たに添加させるため、後部に“何況”が挿入されたと捉えられる。

3. 2. “況復”

古典漢語で抑揚形を構成する際には、“況”に副詞“復”を後置させた“況復”が挿入されることもある。例えば、杜甫「兵車行」“縦有健婦把鋤犁、禾生隴畝無東西、況復秦兵耐苦戰、被驅不異犬與鷄（「縦ひ健婦の鋤犁を把るを有るも、禾は隴畝に生じて東西無し、況んや復秦兵は苦戰に耐へ、驅らるること犬と鷄とに異ならざるをや」）。”では、たとい鋤や鋤を手取るような逞しい嫁がいたとしても田畑の作物は秩序が乱れ、まして秦の兵士は苦戰に耐えられるということで犬や鷄のように追い立てられる、と述べられ、“秦兵”ならば“被驅不異犬與鷄”の状態になることの当然性が“況復”の挿入により強調されている。

本項では、『法華經』に見られる“況復”の使用状況を取り上げる。尚、前項と同様、本項に於いても対象に当たる動詞が“況復”に後続される用例と対象に当たる名詞が“況復”に後続される用例を挙げ、それぞれの特徴について分析を進める。

3. 2. 1. “況復” + 〔対象が動詞となる表現〕

まず、『法華經』に見られる用例の中で“況復”以後の部分に対象の動詞が含まれたものを取り上げる。

次に例文を挙げる。

(9) T09-0013A

況復方便、於彼火宅、而拔濟之。(「譬喩品」)

況んや復方便して彼の火宅より而も之を拔濟せるをや。

(10) T09-0056C

尚不能以、惡眼視之、況復加害。（「觀世音菩薩普門品」）

尚お惡眼を以て之を視ること能わじ、況んや復害を加えんや。

(9) では、発端となる設定は既に(5)の解説部分で記したものと同じである。燃え盛る家屋から子供達を逃れさせるため、長者は羊車・鹿車・牛車を与えると約束したが、結果的には“等与諸子、珍宝大車（「等しく諸子に珍宝の大車を与うる」）。”になった。それに対し、“寧有虚妄不（「寧ろ虚妄ありや不や」）。”つまり嘘ではないのかとの疑問が発生したが、“非為虚妄（「これ虚妄に非ず」）。”と答えられ、理由として(9)直前の部分に“若全身命、便為已得、玩好之具（「若し身命を全うすれば、便ち為れ已に玩好の具を得たるなり」）。”とあり、約束を信じて家屋から脱出した子供達は死ななかつたからこそ玩具を得られたと説明されている。それに続く(9)では、“方便”を利用して子供達を火宅から救済することについて述べられ、その重要性を強調するため“況復”が挿入されている。

長尾1972：114では、六朝時代（3世紀初め～6世紀末）の中国で使用された口語表現の特徴について『法華經』文中での使用状況を資料として述べられ、二音節語“況復”の用例として(9)の部分が挙げられている。但し、その場合の“復”は「また」という原義が薄れ、接尾辞的になっていく傾向の言葉であると指摘されている。

(10) では、“以惡眼視之”が不可能であるという状況が表示された後、“加害”の実施ならば尚更であると述べられ、その当然性を強調するため“尚”“況復”が挿入されている。主体については(10)の直前に“是諸惡鬼（「是の諸の惡鬼」）”と明示され、更にその前に示された“聞其称觀世音菩薩名者（「其の觀世音菩薩の名を称するを聞かば」）。”が条件の部分に当たる。

3. 2. 2. “況復” + 〔対象が名詞となる表現〕

続いて、『法華經』に見られる用例の中で“況復”以後の部分に対象の名詞が含まれたものを取り上げる。前項と同様、この場合でも行為を示す動詞が“況復”以前の部分、対象に当たる表現が以後の部分に置かれた形式が構成されている。

次に例文を挙げる。

(11) T09-0014B

此苦難處、況復大火。(「譬喩品」)

此の苦すら處し難し、況んや復大火をや。

(12) T09-0037B

乃至為法、猶不親厚、況復余事。(「安樂行品」)

乃至法の為にも猶お親厚せざれ、況んや復余の事をや。

(13) T09-0040A

況復乃至、一恒河沙、半恒河沙、四分之一、乃至千万億、那由他分之一。

(「從地涌出品」)

況んや復乃至一恒河沙・半恒河沙・四分之一・乃至千万億那由他分の一なるをや

(11) の直前には、家屋の中に様々な生き物が生息するという状況について説明された部分があり、それに続く (11) では、それですら災難と呼べるが“大火”ならば尚更であると述べられている。ここでは、“大火”の発生が難と呼べる現象に該当することの当然性を強調するため“況復”が挿入されている。

(12) の直前には、“若為女人說法、不露齒笑、不現胸臆 (「若し女人の為に法を説かんには、齒を露わにして笑まざれ、胸臆を現わさざれ」)。”とあり、女性に教えを説く際に避けるべき態度について説明された部分がある。それに続く (12) では、“為法”という条件下に於ける“不親厚”の強制について示された後、“余事”に対しても同様の態度で応ずるべきと述べられ、その当然性を強調

『妙法蓮華經』に見られる“況”字構造の機能的分析（椿）

するため“猶”“況復”が挿入されている。

(13)は、既に挙げた(1)の後続部分に当たり、“将”の対象となる眷属を“恒河”の砂に譬えた場合、その数量が(1)で示されたものより更に少ないのならば、それらの眷属は間違いなく存在すると述べられ、その当然性を強調するため“況復”が挿入されている。尚、“況復”はその後も繰り返し使用され、同じ形式による表現は合計6回の使用が確認される。

4. おわりに

古典漢語の連詞“況”には、文中に掲げられた行為や現象の重要性を表現する機能があり、その効果は戸田1965:141が認める「一方を強調するため他方を軽く抑える」形式の構成を通じて発揮される。例えば、『孟子』「萬章章句」“則天子不召師、而況諸侯乎（「則ち天子すら師を召さず、而るを況んや諸侯をや」）。”では、“諸侯”が“不召師”の実施者として相応しいことの可能性について主張されているが、そこでは、立場が異なる“天子”と“諸侯”それぞれの置かれた状況の違いを強調することにより、一方の重要性を表現するという形式が構成されている。

本論の例文(2)の場合、比較を示される要素には“如来現在”と“滅度後”の2種類の状況が当たる。文中では“況”の挿入による抑揚形が構成され、両者間に成立する程度の違いの甚だしさが強調されたことにより、“滅度後”に“怨嫉”が発生する可能性の高さが表現されている。

また、『法華經』文中では複合語“何況”の挿入による反語形が多用されたことも確認された。戸田1965:148に記されたように“何”に「意味を強める」機能が含まれる可能性を重視すれば、経典の中で特に強い説得性を込めた部分で使用される表現としては、この“何況”は非常に相応しいものと判断された。

『妙法蓮華經』に見られる“況”字構造の機能的分析（椿）

〈参考文献〉

- 牛島徳次1967. 『漢語文法論（古代編）』大修館書店。
太田辰夫1958. 『中国語歴史文法』, 江南書院。
太田辰夫1964. 『古典中国語文法』, 汲古書院。
高名凱1957. 『漢語語法論』, 科学出版社。
白川静1996. 『字通』, 平凡社。
藤堂明保1978. 『漢和大辞典』, 学習研究社。
戸田浩暁1965. 『法華經文法論』, 山喜房仏書林。
長尾光之1972. 「鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』にみられる六朝期中国の口語」, 『福島大学教育学部論集』第24号: 109-120頁。
楊伯俊2016. 『文言語法』, 中華書局。
呂叔湘1944. 『中国文法要略（下巻）』, 商務印書館。
黎錦熙1992. 『新着国語文法』, 商務印書館。

〈注記〉

- 1) 本論が漢語語法の研究論文であることを重視し、“況”の品詞名は「接続詞」ではなく中国で使用されている「連詞」を使用した。
- 2) 高名凱1957: 362は、互いに関連のある命題と命題が独立して存在し、両者間に成立する関係が意味の強化を示す場合、文中に使用される虚詞として“況”を挙げている。
- 3) 本論で引用された例文には『大正新脩大藏經』（全83巻, 1925年7月発行, 1988年2月普及版発行, 大正新脩大藏經刊行会）文中での使用箇所を示す記号を付す。最初のTは「大正」、数字は巻数と頁数、最後のA～Cは段数を示す。
- 4) 各例文の直後には、参考のため『訓訳妙法蓮華經并開結』（井上四郎編輯, 平楽寺書店, 1957年1月発行）に書かれた書き下し文を付す。
- 5) 楊伯俊2016: 166は、古典漢語で使用される転折連詞の機能を転折の強度や方向性により「反転」「他転」「急転」に分類し、“況”の機能は「急転」となっている。

〈キーワード〉

法華經、連詞、抑揚形、当然性